

論文

# 香港総督ジョン・ポープ・ヘネシーと大隈重信

——大隈財政と条約改正における御雇外国人——

重 松 優\*

## はじめに

筆者は近年、大隈重信の秘書峯源次郎に由来する外国人書翰百数十通を調査する機会を得たのであるが、大隈が西洋人と幅広く交際していたことに、あらためて驚かされた〔島・重松 2006〕。早稲田大学の大隈文書には、大蔵卿在任時の来状を中心に、さらに1000点を超える外国人書翰が残っている。同じ頃に外務卿を務めた寺島宗則、井上馨の関係文書でさえも、外国人書翰はわずかに数十通が残るだけだから、大隈文書の外国人関係資料がいかに貴重であるか、疑いをいれない<sup>(1)</sup>。日本を一度も離れなかった大隈が、幕府遣欧使節団の一員だった寺島宗則、数度の外遊を経験した井上馨を遙かに凌ぐ数の外国人書翰を残したことは、いささか不思議にも思われる。しかし、大隈は大蔵卿として、財政問題の諮問、近代化設備の購入を通じて、今日のわれわれが考える以上に、外国人と日々接していたのだろう。

大隈の西洋人に対する態度について、徳富蘇峰はこのようにいっている。

私が特に大隈に感心してゐるのは西洋人を少しも恐

れなかつたことです。あの頃の日本人は、元老でも誰でも西洋人を恐れたのは不思議な程です。…（中略）…伊藤でも、井上でも、若い時外国へ行つて、彼等の優秀さを見たので非常に恐いものだと思つたのです。その恐怖は死ぬ迄ぬけなかつた様だ。山県なども、馬関事件の時には槍をしょいで戦はうとした人だが、外国人は苦手だつたらしい。当時顔を上げてパークスと話の出来る者が幾人居つたか、恐らく大隈一人ではなかつたかと思う〔徳富 1953: 151〕

イギリス全権公使ハリー・パークスの傲岸不遜には、日本側の交渉相手のみならず、アーネスト・サトウら当人の部下までもが辟易していたのである〔萩原 2001: 139-149〕。それは、激高したパークスが寺島外務卿にコップを投げつけたとか、宴席でシャンパンの瓶を床に叩きつけたという類の誤伝さえ呼ぶほどだった〔山本 1943: 216〕。1868（明治元）年、大隈が浦上キリシタン迫害事件の釈明に立った際、大隈のごとき小吏の相手が出来ると怒号したパークスに、大隈が毅然と応対したことは、よく知られた逸話である。大隈は、西洋人の物理的、精神的圧力に屈しないだけの、今日でも稀なたくましさを持っていた。

しかし、外人を恐れないことは、大隈にとつ

\* 早稲田大学大学院社会科学部 博士後期課程3年（指導教員 島 善高）



図版1 上段左より井上勝之助（馨子），駐香港領事安藤太郎，大蔵卿大隈重信，香港総督ヘネシー，工部卿井上馨，大蔵省大書記官遠藤謹助，下段左より安藤文子（太郎夫人），井上武子（馨夫人），ヘネシー夫人キャサリン，ヘネシー夫妻の長男リチャード，大隈綾子（重信夫人），井上末子（勝之助夫人）。ヘネシー総督が妻子同伴で来日したので，大隈，井上も家族ぐるみで応接した。早稲田大学大学史資料センター蔵（B79-4）。

でもう一つの側面があった。すなわち，彼の長所から学び，変革を躊躇しない柔軟性である。大隈は銀行家ロバートソン，大蔵省顧問シャンド，新聞記者ハウス等と親しく交わり，彼らの意見を自己の政策に積極的に取り入れた。近代化の立役者としての大隈は，西洋に対する批判精神と寛容さを，よく兼ね備えていたらしい。そうだったからこそ，『開国五十年史』などの後年の文明運動が，大隈においてはじめて可能となったのではないだろうか。

さて，ここに一枚の写真がある（図版1）。これは1879（明治12）年夏，香港総督ジョン・ポープ・ヘネシー（John Pope Hennessy）<sup>(2)</sup>の来日に際して撮影されたもので，井上馨と大隈が並ぶ珍しさのためか，『大隈侯八十五年史』第1巻，中村尚美『大隈重信』（吉川弘文館人物叢

書），早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』第1巻など，多くの大隈の伝記と資料集に掲載される写真である。当時，大隈は極めて多忙の身でありながら，ヘネシーと3週間に渡って北海道，東北の周遊をしたが，浩瀚な『大隈侯八十五年史』にも，ヘネシー応接についてわずか3行の記述しかない〔大隈侯八十五年史編纂会 1926: 705-706〕。なぜなら，大隈の目論見が全て水泡に帰したからである。それは，ヘネシーを懐柔し，日本の一円銀貨を香港の法定通貨に公認させ，さらに日英関係の改善と条約改正のため，パークスを更迭せしめるという働きかけであった。そして，この運動の背後には，大隈と近しかった2人の外国人，ジョン・ピットマン（John Pitman）とエドワード・ハワード・ハウス（Edward Howard House）

が、深く関係していたのである。

本稿では、「西洋人を少しも恐れなかつた」大蔵卿大隈重信の外交活動の一例として、ヘネシー応接始末を紹介したい。

## 大隈財政の対アジア政策

ことの起こりは、1877（明治10）年10月、日本政府から清国での調査活動を命じられていたイギリス人商人、ジョン・ピットマンから送られてきた報告書だった。ピットマンは8月から香港を訪れ、同地が東洋における「英国ノ最モ枢要ナル殖民地」であり、日本の産物に旺盛な需要があることを指摘し、新任の香港総督ジョン・ポープ・ヘネシーと面会した旨を伝えてきた。ピットマンは以前、ヘネシー総督の部下を3年ほどつとめていたことがあり、香港到着後「実ニ限りナキ優渥ナル待遇」を受け、総督と旧交を温めたという。そして、香港と清国南部向けにイギリスで製造されている補助銀貨を日本銀貨で代用すれば、輸送費用が大いに節約されるだろう、それを証明すれば総督が「此儀ニ助力致スベキハ必然」だと提案したのである〔明治政府翻訳草稿類纂：38巻161-207〕。

明治初期の御雇外国人として、ジョン・ピットマンはなかなか興味深い人物と思われるが、経歴の多くは現在のところ不明である。本人の書翰や外国人人名録、日本政府外交資料に散見される記述によれば、ピットマンは英国海軍を退役後、上海を中心に商売をしていたイギリス人だったらしい。日本との関係は、1872（明治5）年、横浜外人居留地32番館に鉄道寮の代理店を開いたのが、はじまりだったようである〔早稲田大学社会科学研究所 1961: 280; The Daily Press 1872-1885; The Japan Gazette 1873-

1885〕。そして74（明治7）年秋、台湾出兵の後始末に北京へ向かった大久保利通の「従行ノ武官」となり<sup>(3)</sup>、旧知の仲だった駐清英国公使ウェードへの橋渡し役として、和平成立に大きな働きをした〔明治政府翻訳草稿類纂：34巻90-99; 侯爵大久保家 1927: 320-325〕。ピットマンはこのときから、同じく大久保の随従者だった陸軍大佐福原和勝と親しく交わって<sup>(4)</sup>、76年中頃から月額250円の旅行手当を支給され、清国の「政治上ヲ始メ貿易景況其他各般事情等ニ至ル迄」の調査に従事していたのである〔明治政府翻訳草稿類纂：36巻315〕。

大隈文書や『明治政府翻訳草稿類纂』には、ピットマンの報告書、意見書が30通ほど残っている。それらには清国の政治情勢、商況、軍事施設、高官との面談の様子など、一商人として彼が見聞した事柄が丹念につづられており、スパイというほど大仰ではないが、それに類する役割をピットマンは与えられていたのであろう。そして、西南戦争中に福原和勝が戦死し、78年5月、大久保利通が紀尾井坂で落命したのちは、台湾蕃地事務局長官でもあった大隈重信と、関係をより深めていったように思われる。ピットマンは78年7月より、月俸300円で大蔵省・内務省の御雇となった。同8月には、「征台以来の功績」により6000円が贈与されている〔ユネスコ東アジア文化研究センター：361〕。

さて、外国に日本の通貨を流通せしめるといふ、今日からすれば奇抜な計画に大隈が乗り出したことには、十分な理由があった。当時、正貨は有望な輸出品となりえた上に、アジアの国際通貨であるメキシコ銀貨、いわゆる「洋銀」の相場変動に、日本政府は常に悩まされていたからである。1871（明治4）年の大阪造幣寮設

立と新貨条例の制定にも、日本の銀貨を洋銀に代わる存在に育て上げることが、目標のひとつと謳われた<sup>(5)</sup>。大隈は73年頃から東洋銀行横浜支配人口パートソンを通じて、香港総督府に円銀の通貨公認を働きかけた [Robertson 1873]。また74年には、上海に通貨交換所を設立し、大陸で日本銀貨の流通を促進するという計画を立てた [岡田 1956a]。ところがいずれも見通しが立たず、頓挫していたのである。

ピットマンを香港に送った1877 (明治10) 年、大隈は西南戦争の戦費を賄うため、不換紙幣4000万円の市場投入を迫られる。流通紙幣が一挙に5割増しとなったことで、物価は高騰し、国家経済は危機に陥りつつあった。しかし、大隈はその2年前、大久保利通と共に策定した基本方針、すなわち貿易振興と洋銀相場のコントロールで財政困難を克服するという持論を改めようとしなかった [大蔵省財政金融研究所財政史室 1998: 127-137; 中村 1968: 83-124]。したがって、アジア有数の貿易都市たる香港に日本銀貨を通用せしめ、輸出を増進することは、当時の大隈財政における有望な具体策であり、ヘネシーへの働きかけに、大隈は大きな期待をかけていたと考えられる。

シンガポールを中心とする海峡地帯のイギリス植民地には、既に1874 (明治7) 年頃より日本銀円が広く流通していたという<sup>(6)</sup>。香港では洋銀、アメリカ銀貨が法定通貨の地位を得ていたから、総督の支持があれば、ここに日本銀貨を加えることは決して難題とは思われなかっただろう。大隈はこの機会をとらえて、ピットマンに香港の銀行、有力商社などの意向もさぐらせ、4か月後の1878 (明治11) 年2月12日、香港領事安藤太郎をして通貨公認を公式に申し入

れた。大隈はこの時、洋銀より良質なアメリカの420グリーン銀貨に対抗するため、同じく420グリーンの「新貿易銀」をつくって香港へ輸出すると明言した。ところがアメリカが銀貨重量を412.5グリーンに落とすと聞き込み、「悪貨は良貨を駆逐する」というグレシャムの法則に基づく反対意見を受けた大隈も、新貿易銀鑄造を中断せざるを得なかった。9月、安藤太郎は公認法貨を416グリーンの一円銀貨に替えてもらいたいという「如何ニモ不体裁」な申し入れをせねばならず、ヘネシーがどう出るか「痛心」していた。ところがヘネシーは、変更を快諾したのみならず、香港の商工会議所は飾りだけのもので、仮に反対があっても本国政府に自分が上申するから心配無用とまで請け負ったのである。[外務省 1950a: 315-325]。

### 異色の植民地総督、ジョン・ポープ・ヘネシー

かくも順調に交渉が進んだ理由には、ヘネシー香港総督の性格が大いに関係していたように思われる。ヘネシーは非白人を優遇し、“native race craze (土民狂)”と揶揄されるほど、ビクトリア時代のイギリス人としては、型破りの人物だったのだ [Pope-Hennessy 1964; Stearn 2004: 379-382]。

ここで、すこし話がそれるけれども、大隈が相対したヘネシー香港総督の経歴について、触れたいと思う。ジョン・ポープ・ヘネシーは1834 (天保5) 年、皮革商人の息子として、アイルランド第三の都市、コークに生まれた。ヘネシーははじめ医学を学び、軍医としてインドに派遣されるはずだった。ところが生来の冒険家で、政治に魅了されていたヘネシーは、1855



(安政2)年、訓練のため滞在していたロンドンで医者を廃業し、枢密院議長グランヴィル伯の事務官に転じた。さらに4年後、23歳の若さで保守党から下院選挙に出馬する。この時、ヘネシーは金も地位もない全くの泡沫候補だった。友人は“My friend, you will die in a ditch (君は野垂れ死にするぞ)”とため息をついたけれど、どうしたわけかヘネシーはこの選挙で見事に当選したのである。

議会でのヘネシーは、パルマートン子爵の自由党内閣を得意の弁舌で攻撃し、まずまずの活動をしていたが、ポーランド問題で一躍雄飛の機会を得た。ナポレオン3世やオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフと面会して、帝政ロシアのポーランド人迫害を非難し、国際的な脚光さえ浴びた。しかし、好事魔多しというべきか、1865(元治2)年の選挙にヘネシーは7票差で落選する。そしてその翌年、債権者から逃げ回っていたヘネシーに手をさしのべたのが、パトロンの大蔵大臣ベンジャミン・ディズレーリだった。ディズレーリはボルネオの西北に位置する、日本でいえば八丈島程度の小島、ラブアン島総督の地位を周旋したのである。(ヘネシーとピットマンが知り合ったのも、ここラブアン島だった。)ここからヘネシーは植民地総督として、西部アフリカ、バハマ、バルバドス、香港、モーリシャスと、熱帯の僻地を20年近くも転々とする<sup>(7)</sup>。

植民地におけるヘネシーは、先住民にしばしば同情的で、その権利拡張を容認する政策を数多く打ち出した。それには、ヘネシーがアイルランド人として、被支配民族の悲哀を十分に経験していたことが背景にあったといわれている。12世紀以降、アイルランドは常にイングラ

ンドの支配下にあり、1801(享和1)年に形式的な独立も失っていた。1845(弘化2)年には、いわゆる「ジャガイモ飢饉」が起きている。アイルランドの人口800万のうち100万人が餓死し、さらに100万人が国を捨てて海外移住を選ばねばならなかった。このとき十代の少年だったヘネシーも、市街から連綿と運びだされてゆく死者を間近にしたはずだ。

たとえば西部アフリカ植民地では、ヘネシーは課税を減免し、大学設立を支持して、クレオール(白人黒人の混血者)を総督府の高官に登用しようとした。香港では施政協議会にはじめて中国人を任命し、土地所有も許している。白人と非白人が同等視されなかった時代に、先住民を総督府に招き入れ、友人としての交わりさえ結んだヘネシーに対して、先住民たちの支持は絶大だった[Pope-Hennessy 1969: 76-80]。アフリカでは「ポープ・ヘネシーの日」が祝われ、モーリシャスではヘネシーの帰国後に銅像が建てられるほどだったのである。

しかしその一方で、ヘネシーは自己過信におぼれ、その政策はおおむね失敗に終わった。プロテスタント教徒を冷遇し、一部の部下を偏重しては突如手のひらを返すという、リーダーシップと人格上の欠点もあった。西部アフリカでは着任してまもなく、15年のキャリアを持つ地方長官を「君はこの国も、土地も、人間も何もかも分かっていない」と放言した上で更迭し、既存の政策を一変した結果、敵対部族の侵入と第2次アシャンテ戦争につながった。バルバドスでは、植民省のバルバドス連邦化方針を実現できず、イギリス人植民者の反発と先住民の暴動を呼び、1年足らずで帰国を命じられた。ヘネシーの行くところ、公金は濫費され、部下

は反発し、植民地は幾度となく混乱に陥った。「まったく常識と能力に欠ける」、「彼の世界の中心は彼自身だった」、「犯罪被害者より犯人に同情的」といった評価に、ヘネシーの劣悪な一面が表れている [Stearn 2004: 381, 382]。

ヘネシーが人類愛の先覚者だったのか、あるいは無能極まりない行政官とされるべきか、本稿ではその判断を下すことはできない。しかし、イギリス人植民者の多数は、後者の見方に組したであろう。ヘネシーの香港総督就任を伝え聞いた横浜のジャパングゼット紙は、以下のような記事を掲載した。

他の植民地総督であれば間違いなく首になっているはずなのに、ヘネシー氏は出世を続けている。これはヘネシー氏がフランスの諺でいうところの、「死体が埋められるのを見た」か、イングランド内地の大物の恐るべき秘密を握っているか、何らかの理由がなければ実に理解しがたいことである。現実におけるヘネシー氏の昇進は、氏の並程度の才能に帰することもできない。ヘネシー氏はおしゃべりが上手であるが、センスに欠けている。氏の社会的地位も、業績も、まったく昇進の理由とはなりえないのだ。おそらく50年後には、ゴシップ好きの伝記作家が、この謎を解き明かしてくれるだろう。しかし、今ヘネシー氏の存在に耐えねばならない我々の世代にとっては、まったく慰めにもなりはしないのだ [The Japan Gazette 1879a]。

ジャパングゼットはパークスに近い強硬主義をとっていたイギリス系英字新聞であるが、さらにヘネシーの来日に際しては、「当地の同胞はヘネシー氏を全く歓迎しない」とまで断言した [The Japan Gazette 1879b]。また、チャールズ・ワーグマンの風刺誌ジャパンプンチは、ヘネシーをアイルランド訛りが抜けない小男として、たびたび描いている (図版2)。

ここにふたたび、民族問題の影を感じ取るこ

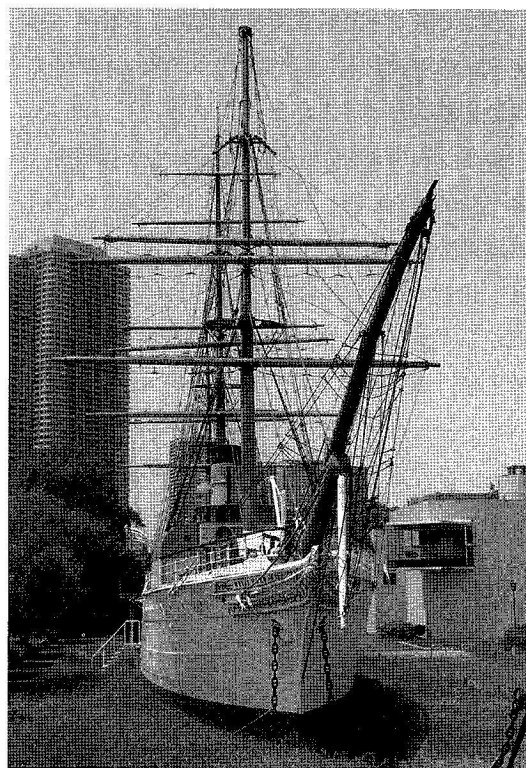
とは、決して穿ちすぎではないはずである。たとえ植民地で最高の地位にあったとしても、当時のアングロサクソンの世界観においては、ヘネシーが二流民族たるアイルランド人であることに変わりはなかった。この点で、ヘネシーが終生崇拜し、1874 (明治7) 年から首相に就任していた Дизレーリ と、人物のスケールが異なるとはいえ共通するところがある。ディズレーリがユダヤ人だったことは、周知の通りである。

そして条約改正をはじめとする、明治日本が19世紀の国際環境で直面した問題も、一面において民族問題だったことには疑いをいれない。欧米列強が日本を対等にあつかわぬ理由として、西洋人は日本の未成熟をあげ、日本人は白人の傲慢と人種差別を非難していた。このとき、被支配民族でありながら植民地総督となった人物、アジア人に特に理解を示すというヘネシー香港総督とめぐりあい、大隈たちは外交の活路を見出したように感じたのではないだろうか。

## ヘネシーの来日と貿易振興

1879 (明治12) 年2月18日、大隈はヘネシー香港総督が休暇のため日本を訪問すること、その接遇は大蔵省が担当する旨を太政官に上申した。

香港鎮台ヘンネッシー氏来月中旬頃本邦へ渡航ノ趣該港在留領事安藤太郎ヨリ電信ヲ以テ報知有之候、右ヘンネッシー氏ハ該港ニ在テ英國該植民地ノ全權ヲ有シ頗ル勢力アル顯職ノ者ニ有之、殊ニ本邦貿易上ノ便宜相謀、就中先年以來我々円銀貨ヲシテ該地ノ通用貨幣タラシメントスルノ一条ニ付テハ同人於テ頗賛成、本国政府ヘモ申立終始尽力不少候趣、是亦安藤領事ヨリ追々申越シノ次第モ有之、且又該港



図版2 (左) 「日本財政の講義をうける香港総督」。“Japan Punch” 1879年7月号に掲載されたチャールズ・ワグマンの風刺画。シーソーにドル（正貨たる銀円，ジャパニーズダラーとも考えられる）を乗せることで，キンサツ（紙幣）の価値が重くなる。右の人物がヘネシー，真ん中が大隈，左はワグマンの友人で写真家として著名なフェリックス・ベアト。ベアト当時様々な相場に手を出しており，投機関係のワグマンの漫画にしばしば登場していた。

図版3 (右) ヘネシーと大隈が乗船した明治丸（筆者撮影）。明治7年の巡幸では天皇の座乗船となった。現在，重要文化財として日本海洋大学越中島キャンパスに保存されている。

ノ儀ハ本邦接近ノ地，我領事モ彼差置，既ニ三井物産会社広業商会等追々出店相開キ，益我貿易ノ拡張ヲ企望候場合，旁暗ニ本邦ヘノ渡航相促候儀ニ付，弥来朝ノ節ハ諸事当省ニテ担当鄭重ニ待遇候様致シ度…（後略，傍点読点筆者）〔太政類典：第3編第16巻外国交際78-89〕

1877（明治10）年10月の段階では，香港に日本の商社がいまだ存在しないとピットマンは報告していた。当時ピットマンが上申した副領事安藤太郎の領事昇格は同月中に採用されているから，あるいは三井物産と広業商会の香港進出

にも，ピットマンの報告書が一役かったかもしれない〔明治政府翻訳草稿類纂：38巻180, 185；青山学院資料センター1994：35〕。また，ヘネシーが暗に受け入れを要求し，大隈が阿吽の呼吸で応じたことも興味深い。

実際にヘネシーが横浜に着港したのは6月である。この年は賓客の来日が相次いだので，日程調整をしたのだろう。1879年は4月にイギリス下院議員リード，5月にドイツ皇孫ハインリッヒ，6月に前アメリカ大統領グラント，8月にはイタリア皇族ジェノヴァ公が来日した。

ことに6月から9月まで日本に遊んだ前アメリカ大統領グラントに対しては、官民をあげての大歓迎がされている。

ヘネシーの来日は、あくまで私的な休暇を目的としていたから、たとえば上野公園での一日の歓迎会に3万円がついやされたグラントの応接と比較すると、数段控えめだったのである<sup>(8)</sup>。しかし、グラントの接待委員に伊達宗城、蜂須賀茂韶、鍋島直大らの旧大名がついた一方で、ヘネシーには第一級の実力者である大隈と工部卿井上馨が応接掛になった。さらに、大隈、井上ともに、数週間の地方視察に同行したことは、ヘネシーが決して等閑視されるべき存在でなかったことを示している。

井上馨が大隈と共にヘネシー接待にあてられた理由は判然としない。ただ、外遊経験が長く家族ともに外国人慣れしていたこと（冒頭にかかげた写真で、大隈夫人の和装に比して、井上家の女性がドレスを着こなしていることを思い出されたい）、産業振興が工部省の管轄だったこと、井上が渋沢栄一をはじめとする財界人に強固なパイプを持っていたことが考えられる。ヘネシーは工部卿官邸に宿泊し、井上は大隈と同様、熱心に歓待につとめたから、井上の応接掛任命をもって、ヘネシーの接遇は大隈・井上の共同事業になったのだろう。

さて、ヘネシーの日本における路程は、読売新聞、ジャパングゼット、『井上公伝』、大隈文書遠藤謹助書翰などの資料によれば以下の通りであった〔井上馨侯伝記編纂会：119-127他〕。

6月7日、横浜着、大蔵卿大隈重信が出迎え、汽車で東京へ、工部卿井上馨邸に泊まる

同8日、井上が長崎立神造船所落成式から帰京

同9日、井上工部卿官邸で宴会、楠本正隆東京府知

事、渋沢栄一、益田孝、岩崎弥太郎、三野村利助、ビットマンらが参席

同10日、井上同道にて天皇皇后に謁見

同11日晚、井上と新富座で芝居見物

同12日、開拓使仮博物館と青山試験場の競馬見学、夜は横浜町会所で宴会、大隈、井上、内務卿伊藤博文、海軍卿河村純義、開拓長官黒田清隆、大蔵大輔松方正義ほかが来会

同13日、東京商法会議所で貿易について演説、散会后三野村利左衛門宅で饗応を受ける

同16日、井上馨夫妻と江ノ島鎌倉を遊覧

同17日、井上夫妻と共に横浜から関西へ向かう、造幣局に出張する松方正義も同船（神戸で昨年来コレラが流行していると聞き、途中で引き返す、ヘネシー夫妻の長男はアフリカで赤痢に罹り早世していた）

同18日、大隈・伊藤が銀貨問題について会議

同23日、東京へ帰着

同24日、女子師範学校などの学校を視察、上野静養軒で昼食、博物館見学

同25日、井上と日光へ出発

7月3日、日光より帰京

同7日、日比谷公園でのグラント前大統領歓迎閱兵式に参加

同8日、大蔵省の金庫を見学

同12日、北海道へ出発予定だったが、ヘネシー夫人の希望で一日延期して花火見物

同13日、大隈が同道して政府船明治丸で函館へ向かう、途中、仙台に寄港、監獄など視察

同20日、札幌着、監獄や学校を見学

同21日、七重の試験場、養蚕場を巡覧、海産物を試食

同22日、アイヌの舞踊、競馬の饗応を受ける、晩に税関の楼上から演説を成す

同23日、小樽へ出発

同28日、小樽発、秋田へ向かったともされる

8月4日、帰京

同5日、上野静養軒で井上と会食

同9日、天皇皇后と内謁見、鑑兜と太刀などを賜る

同10日、汽車で横浜へ、三菱会社の高砂丸で神戸へ向かう。大隈・伊藤・井上が見送りをし、松田内務大書記官が神戸まで同道。

同12日、大阪で大阪府知事渡辺昇主催の晩宴会、参

加者に大阪鎮台司令官三好重臣、遠藤謹助、造幣局長石丸英世、安藤太郎、大阪商法会議所会頭五代友厚、ピットマン、東洋銀行大阪支店長リード同13日、造幣局を視察、京都へ向かう、さらに琵琶湖や奈良に遊ぶ

同25日、神戸出発、大阪主張中の松方正義が長崎まで同船する

8月31日、上海着、オリエンタルバンク支店に宿泊

9月3日、上海発、香港へ向かう

ヘネシーもまた、香港での対日貿易拡大に、真正な望みを持っていたことが、この過密な日程から窺えるのである。ヘネシーは大蔵省の諸施設と、各地の試験場を視察し、東京大阪の有力商人とも接触した。ことに6月13日の東京商工会議所演説は、多くの新聞に掲載され、好評を持って受け取られた。清国の官吏は日本との貿易拡大を望んでいる、日清貿易は日本の輸出が多いただけ、日本にとって正貨備蓄を期待できるなど、ヘネシーは景気のいい話をした〔読売新聞 1879〕。(なお、ヘネシーがこのとき外債の弊に警鐘を鳴らしたことは、のちにグラントが天皇に同様の進言をして、大隈の外債導入意見が葬られる理由となっているから、実に興味深い。)翌月の札幌税関での演説にいたっては、日本の対清輸出は遠からぬ日に5倍になるだろう、私はこう予測することに躊躇しない、とまで言い切った〔Japan Weekly Mail 1879〕。

そして大隈も、ヘネシーが滞日中の6月27日、太政大臣三条実美に「財政四件ヲ挙行セン事ヲ請フノ議」を提出して、輸出奨励を財政再建の柱とする既定路線の正当性を力説した。紙幣消却の必要は認めたものの、紙幣増発をインフレの主因とする批判は「虚吠」であり、産業を育て「洋銀ノ勢力ヲ圧倒シ我貿易銀ヲシテ其地位ヲ占有セシメ」なければ危機は乗り越えら

れない、と大隈はいう。ヘネシーを通じての経済政策の実現は、このとき大隈財政の要となっていたのである。

## パークス排斥と E. H. ハウス

ところで、かくも日本に好意的で、イギリス首相ディズレーリにも親しい有力者が来日しているのならば、パークスの反対で頓挫していた条約改正交渉の打開にも、力添えを期待する考えが生じてくるのは、当然のことだったように思われる。日本政府はすでに、ヘネシーの2ヶ月前に来日したイギリス下院議員リードにも条約改正問題での助力を頼み、のちに1000ポンドの議会運動費を渡したというから、こうした工作は当時、外交の既定方針だったのだろう〔林 1910:160-162〕。そして、ヘネシーにも同様の働きかけがされるであろうことは、公然の秘密となっていた。東京商工会議所の集会では、副会頭福地源一郎が手短かに歓迎の意を表した後、ヘネシー総督のいう貿易振興には関税自主権の回復が不可欠である、「閣下の才敏なる必らず其障礙物は如何の性質に出づる乎を詳らかにし又必らず之を排除する方法を察するべし」と、賓客を迎えるにはいささか場違いな演説をした〔読売新聞 1879〕。多くの新聞が同じような社説を掲げる一方、ジャパンガゼットに代表される在日外国人の一部は、香港総督と条約改正に何の関係があるか、と反発している〔郵便報知新聞 1879; Japan Gazette 1879c; Japan Gazette 1882: 310〕。

このとき、ヘネシーへの橋渡し役となったと目されるのが、大隈と親しかったもう一人の外国人、エドワード・ハワード・ハウスである〔昭和女子大学近代文学研究室: 1957〕。ハウス

は1836（天保7）年生まれのアメリカ人ジャーナリストで、69（明治2）年、大学南校教師・ニューヨーク・トリビューン紙の通信員として来日した。大隈との接点が生じたのは、ハウスの場合も74年の台湾出兵だったらしい。ハウスは従軍記者として、日本の立場を西洋諸国に説明、弁護する役割を担った。台湾出兵をきっかけに、ルジャンドル、ハウス、ピットマンらの親日的外国人のグループが形成されたこと、大隈が彼らを非常に頼みにしていたことは、ここであらためて指摘しておきたい。

1877（明治10）年1月、大隈は政府系英字新聞の必要を説くルジャンドルに従い、ハウスに一定量の購入を約束して、トーキョータイムス紙を創刊させた。これが「大隈氏の新聞」であることは、対立するジャパンガゼットなどにも明らかだった [Japan Gazette 1979d]。活動の場を得たハウスは日本の擁護に健筆を振るい、横暴な外国人、とくにパークス攻撃に最も力を注

いだ。ハウスの筆は、しばしば常軌を脱した個人攻撃に終始したので、公使団が取材を制限したり、ジャパンパンチが幾度となく漫画にしたりして、外国人の間ではまさに厄介者というべき存在となっていた（図版4）。ヘネシーが来日する79年の2月、大蔵省の機密書類がジャパンガゼットに暴露されるという事件が起こる。このとき、ハウスはパークスが書類をガゼットに渡したに違いない、「定テ大隈公ニモパークス氏ノ一切信任ヲ措クベカラサル者ナル事ヲ唯今御承知相成可申ト存候（強調原文）」と書き送った [侯爵大隈家蔵版 1935: 520-522]。

条約改正のためにはパークスが必ず排除されねばならない、この認識がどの時点で日本政府に生まれたのか、ハウスがそこにどのように関係し、ヘネシーに対してどう働きかけたのか、これらを具体的に示す資料は、残念ながらまだ見出せずにいる。しかし、外務卿となった井上馨がハウスへの年金支給を上申した際に、ヘ



図版4 「ああそうだろうとも！」。「Japan Punch」1879年7月号。日本政府の「庇護」を受ける和服姿のハウスが、パークスを「あんたは東洋のいじめっ子だ！」と非難し、パークスは「それは結構」と笑い飛ばしている。

ネシー応接が功績のひとつとして言及され、さらに外交機密に通じるハウスを年金で日本側に留め置く必要があるとまで述べられているから、ハウスは当時の外交において相当な役割を果たしたはずだ〔公文別録：外務省・明治16年～明治18年・第1巻・明治15年～明治16年〕。そしてヘネシーも、大隈に対してハウスほど良い記事を書くジャーナリストはそういないと持ち上げたほどであるから、ハウスと少なからぬ接触を持ち、その意見、人物に好感を抱いたと考えられるだろう〔Hennessy 1881〕。

通訳として大隈・ヘネシーの北海道周遊に同行した林董（当時工部省・外務省書記官）によれば、大隈が「条約改正税権回復の要を…説及する毎に、ヘネシーは巧みに話頭を他に転じて数週間の旅中終に何等の要領を得ずして帰京」したというのである〔林1910:163-164〕。ところが、条約改正は措くとしても、パークスの追い落としについては、ヘネシーと大隈、井上の間で、意見の一致があったらしい。大隈文書には、ヘネシーが外務大臣ソールズベリ侯と、野党自由党の巨頭、グラッドストンに宛てた書翰の写しが存在する。非常に興味深い内容であるので、2通とも全文を紹介したい。

1 通目の書翰は、井上と関西視察の予定をコレラ禍のため中断し、あらためて日光へ出発する直前、外務大臣ソールズベリ侯宛に書かれた〔Hennessy 1879a〕。ソールズベリはこの10年後、大隈が外務大臣として条約改正にとりくんだときにもイギリスの外相であり、1902（明治35）年の日英同盟締結に際しては首相となっている。

密信

東京 1879年6月24日

親愛なる閣下

私に手紙を差し上げる自由をお恵みくださった閣

下の寛仁さによりまして、東洋におけるわが国益といういささかデリケートな問題について、ここに少し申し上げたく存じます。

中国と日本でのイングランドの影響力は、望むべき姿にありません。最近になって中国では改善の兆しを見せておりますが、日本では最低の位置にあります。全ての問題に今や解決の見込みがなく、わが外務省の活動が行き詰まっていると、ごく一部ではなく、あらゆる方面から私は見聞をいたしました。

どのように、そして何ゆえにかかる事態が看過されてきたのか、私から申し上げるべくありません。しかし、閣下への個人的な敬意ゆえに、当地における閣下の代表者（訳注、英国全権公使パークス）は、はるか以前に帰国しているべきであった、という事実を隠すわけにも参りません。実のところ、英国の国益に関しまして、外交の停滞は東京では醜聞というべき状況に陥りつつあります。一方、アメリカ、ロシア、イタリアは、寺島氏はじめ日本政府の人々と円滑、迅速に折り合いをつけているようです。

私個人といたしましては、パークス公使を実に好人物と思っております。しかし、閣下がパークス公使をロンドンに召還して、ケネディー氏を代理公使とするならば、まもなく事態の好転を見ることになると思われます。

そして、駐清国、駐日本公使に専門家を任命するという制度は、近々見直されるべきでありましょう。これまでにいささかの利点があったとしても、それは効果を失いつつあるのではないかと私は考えます。閣下の多くの有能な部下には、ヨーロッパ外交と世界と広く交わることで鍛えられた高度な能力を持つ、公使となるにふさわしい人材が幾人もいるはずです。中国語または日本語の能力は、外務省による真正の、正式な訓練とは比べようありません。専門家たちは、自身のわずかな視野より先を見ることができないのです。一方で、幅広い経験を持つ人間は、政府が他所で直面しているであろう困難を忘れることがなく、英国の国益が何であるか、より深い理解を持っております。

長々と申し上げましたことをお許しください。

（署名）J. ポーブ・ヘネシー

ソールズベリ侯爵閣下



2通目は、香港へ帰国の直前に書かれた、グラッドストーン宛の書翰である [Hennessy 1879b]。1868年から74年まで内閣を組織していたグラッドストーンは、79年当時は自由党党首も退き、一国会議員としてディズレーリに対していた。ヘネシーとグラッドストーンの関係は明かでないが、のちに東洋問題について意見交換をする程ではあったらしい [Hennessy 1880a]。

W. E. グラッドストーン下院議員閣下、チェスター、  
ハワードン城

日本国奈良、1879年8月24日

密信 親愛なる閣下

同封いたしました日本の大蔵卿の紹介文に、閣下はご興味を持たれるかもしれません。大隈氏のような困難に直面した財務大臣は、これまでわが国でさえも絶えて無かったように思われます。

大隈氏は閣下のご活躍を熟知し、しばしば閣下に言及されます。しかし、今日の日本では遺憾ながら、英国にまつわるあらゆることが、わが駐日公使の辛辣な施策のために、色眼鏡を持って見られているのです。

パークス前駐広東領事は、今日では公使に任命され、さらに授爵のうえハリー卿となりました。彼は以前と変わらず有能で、私個人は好人物と見ておりますが、清国駐在時と比べると、穏やかさを欠くようです。

私の旧友の政治家たちは、東洋におけるロシアの影響力をよく話題にするのですが、彼らは日本の有力者たち全てと、今日学校と大学を通過しつつある新しい世代が、イングランドを自国の敵とみなしていることに、ほとんど気付いておりません。この点については、閣下が首相職を離れて以来、真に深刻な事態に陥りつつあります。ダービー伯（筆者注、前任の外務大臣）とソールズベリ侯が座視を決め込んできたわけではありませんが、日本のように遠隔の地は、しばしば忘れられてしまうものです。そして実のところ、外務省での対清国対日本の政策は、一人の人間、香港の司法長官だったジュリアン・パウンズフォート卿が掌握するに至りました。ジュリアン卿は、いかに職務に勤しむといえど、イングラ

ンドの真実の国益ではなく、在外商人の利益をわずかに代弁するのみです。

ミカドの高官たちは、パークス英国公使が際限のない恫喝の態度を改め、グラッドストーン氏がヨーロッパのみならず遠く離れたボルネオにさえ適用した寛大な政策を選択することはないのだろうか、もしそうなればイングランドに対する国家感情は大変違ったものになるだろうに、と私に幾度となく洩らしました。

恫喝と嫌がらせが英国の影響力に寄与できない間に、ロシアとアメリカの公使たちは、日本で有利な地位を占めつつあります。彼らがその位置にあるべき資格を欠いていることは、わが商務院貿易報告書に明らかです。

（署名）J. ポープ・ヘネシー

函館での演説の写を同封いたしました<sup>(9)</sup>。

かかる秘密通信の写しが、なぜ大隈文書に残っているのか考えたい。まず、これら2通の端正な筆跡は、大隈文書中の他のヘネシー書翰と一致せず、実はピットマンのものであるようだ。筆者は当初、ピットマンが大隈に取り入れるため書翰を捏造した可能性を考えたが、大英図書館のグラッドストーン文書に当該書翰を確認できたので、ヘネシーが実際にこれを書いてグラッドストーンに送りつけたことは間違いない [Hennessy 1879c]。おそらくソールズベリにも、パークス批判の書翰が届けられただろう。

では、ピットマンは秘密裏に写しをつくったのか、それともヘネシーの承諾を得ていたのか。1879（明治12）年頃、ピットマンは大陸での拠点を上海から香港に移し、翌80年2月には阿片専売権を得るべく奔走していた [The Daily Press 1878-1879; 外務省 1950b: 315-325]。御雇外国人として、ピットマンは日本政府に多少の義理はあったけれども、ヘネシーに近づく利益はさらに大きく、露見すれば生活の糧が絶

たれるほどの行為を、あえて実行はしなかったのではあるまいか。また、ヘネシーが帰国後、ピットマン、ハウスを介して大隈に親密な書翰を送り、少なからぬ便宜をはかったことを考えると（これは後述する）、彼らの間に相当の信頼関係、敢えていうなら共犯者的なつながりが築かれていたようにも思われる。

ヘネシーのグラッドストン、ソールズベリ宛書翰の内容は、いずれもヘネシーの植民地行政の方針に忠実である。親和政策を旨としたヘネシーが、植民地の保守的な官僚や商人と幾度となく衝突したことは既に述べた。また、ソールズベリ宛書翰にも見られるように、ヘネシーはゼネラリストたる政治家を自認し、「専門家」への対抗意識が強かった。一方のパークスは、父母を幼くして亡くしたために、15歳にして在清イギリス公使館通訳となった叩き上げで、まさに「専門家」の典型だった。清国と日本で30年以上を過ごし、自らの経験に絶対的な自信を持つパークスは、頑迷な東洋人には高圧的手段をとらざるを得ないと信じていた。根本的な世界観において、ヘネシーとパークスは反りが合わなかったのである。

さらに、ヘネシーとパークスの対立は、理念上にとどまらず、実際の軋轢として噴出していた。ヘネシーは横浜に着港直後、香港総督にふさわしいだけの儀礼をパークスが私的訪問を理由に許可しないと声高に不満を述べた。そして日本の軍艦に移乗し、本来は大使にしか許されない祝砲17発を聴くという小事件を起こした。滞日中はずっと、ヘネシーはパークスを避けていたという〔林 1910: 162-166; Pope-Hennessy 1964: 265〕。

筆者はまた、グラッドストン宛書翰に見られ

るナイト勲爵士（いわゆる Sir, …卿とよばれる人々）への揶揄に注目したい。パークスはアヘン戦争での功績により、1862（文久2）年の早い段階でナイトに叙せられた。グラッドストンは終生、勲爵位を固辞した人間であるから、ヘネシーがグラッドストンに対してこのような文言を使うことに不思議はない。ところが、ヘネシーはこの翌年、KCMG 勲章とナイトの称号を喜々として受けている。ヘネシーがパークス排斥に加担した背景には、常々“Sir Harry”に対して“Mr. Hennessy”に甘んじていた嫉妬もあったのではないだろうか。

真相の多くは藪の中だが、パークスがどれだけ公使として不適当であるか、大隈が第三者たるヘネシーをしてイギリス本国の中枢に知らしめた、これだけは疑いのない事実である。ついでながら、のちに民権派の旗手として、グラッドストンと折々比較された大隈が、本物のグラッドストンとこのような形で接点があったことは、いかにも面白い。ヘネシーは当初6週間の予定だった休暇を3か月にのばして、8月下旬に日本を離れた。このときヘネシー、大隈ともに、その収穫に満足し、貿易拡大とパークス排除の成功に、楽観的な希望を抱いていたようである。

## おわりに

ヘネシーとの友誼を頼みにする外交は、その後もしばらく続いたらしい。ヘネシーの帰国後、間もなくして外務卿となった井上馨は、パークスの排除にあたってヘネシーは重要であるから、くれぐれも丁重に接するようにと安藤香港領事に指示している〔井上 1879〕。大隈も1880（明治13）年2月、ハウスを香港に送って

ヘネシーに表敬訪問をさせると共に、通貨公認の情勢を探らせた(図版5)。ところがちょうどハウスが香港に到着した頃、ロンドンでは造幣局長の反対によって、日本銀貨の公認を拒否する旨の決定がされたのである[外務省編 1950b: 535-553]。

大隈はこの後も通貨公認に望みをつなぎ、ヘネシーからは本国に翻意を働きかけっていると度々連絡を受け取った。しかし、1881年12月、大隈が政府から放逐され、大隈財政も否定される日が先に到来した。ヘネシーも、夫人との不貞行為が疑われた地元の有力者に、傘で殴りかかるというスキャンダルを起こし、82年3月に香港を離れた<sup>40)</sup>。パークスが駐清国公使に転任するのは、翌年1883年の7月だから、大隈とヘネシーの目論見は、まったく皮肉な結果に終

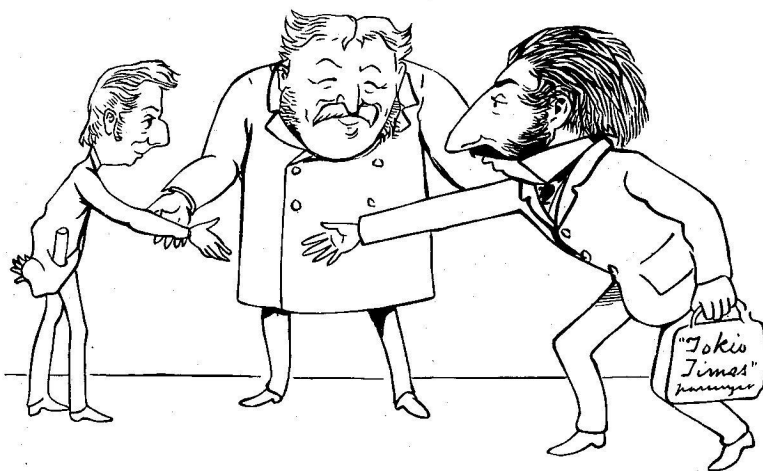
わったのである。

林董は一連の顛末を、伊藤博文の口を借りて、このように批判している。

ヘネシー接待の当時、井上侯は頻りに多忙なる苦情を述べ、「斯る時、伊藤にても手伝い呉ればよきに、それもせぬ」と云わるるを以て、予は之を当時内務卿たりし伊藤公に語りたるに、公は、「井上が、英政府の信任する公使を措いて、他の力を借りて条約を改正せんとするは間違なり」とて、更に頓着せられざりし。

したがってヘネシー応接はまったくの徒勞であり、「外交に小刀細工の有害無益なること」の証明となったとさえ、林は断言する[林 1910: 164]。工部省大書記官だった林がパークス更迭の企てを知らなかったとは考えられないが、林はそれについて回顧録でほとんど触れていな

*The Governor of Hong Kong and his guest  
Touching scene.*



図版5 「香港総督と客人、感動のシーン」。ハウスの香港訪問を皮肉るワーグマンの風刺画、「Japan Punch」1880年2月号掲載。左がヘネシー総督、右がハウス。中央の人物は79年9月号で、香港へ帰国するヘネシーに「ピットフォール（落とし穴）君、船賃は払わんと彼等についてくれたまえ！」とねじ込まれている人物と同じで、ピットマンであるらしい。以上、すべてのワーグマンの風刺画は、雄松堂出版『復刻版ジャパンパンチ』より転載した。

い。パークスに同情的で、のちに駐英日本公使となり、日英同盟締結を導いた林には、かかる出来事は思い出したくもなかったのだろう。林の批判は正論である。しかし、いまだ国力が低迷していた当時を考えれば、いささか厳しすぎる評価なのではあるまいか。

また林の記述には、少なくともひとつ誤りがある。1880年の夏、資金難でトーキョー・タイムスを廃刊したハウスは、大隈と協議のうえ欧米周遊に出発した〔侯爵大隈家 1934: 146〕。このときヘネシーは助力を借し、名士宛の紹介状を東京だけでなく、ハウスの滞在先だったロンドン、ニューヨークにまで送っている〔Hennessy 1880〕。そしてハウスは目的のひとつだった下関事件の償金返還を実現させ、この78万5000ドルは横浜港の整備に使われた。当人達の予想もつかないかたちで、貿易振興に資することができたのだ。

ハウスの欧米行には、条約改正について列国の真意をはかり、「パークス氏の権力を抑制するの手段を講ずる」狙いもあったという〔侯爵大隈家蔵版 1934: 142-150〕。ハウスがどれだけ大隈に信じられていたか、これは歩行ができなくなった晩年のハウスに、大隈が天皇から下賜された車椅子をゆずったことからわかる。しかしこれらの後日談は、また稿を改めて論じることとしたい。

〔投稿受理日2006. 5. 26／掲載決定日2006. 6. 8〕

#### 注

- (1) 国会図書館憲政資料室寺島宗則文書の外国人書翰は約40通、同井上馨文書は50通である。青木周蔵文書は現在所在不明で、伊藤博文文書には130通があるが、多くは李完用ほかの朝鮮人から伊藤朝鮮統監にあてたものである〔寺島宗則研究会

1987; 国立国会図書館参考書誌部 1975; 伊藤博文関係文書研究会 1973-81〕。

- (2) ヘネシーの名字は、ポープヘネシーとも表記できる。“Pope”はヘネシー家の男子に常にあたえられたセカンドネームで、彼の子から“Pope-Hennessy”とハイフンがつけられ、その名字としての性格が明瞭となった〔Pope-Hennessy 1964: 15〕。なお、コニャックで知られるヘネシー社は、フランスに移住した同族の設立にかかり、戦斧の紋章はアイルランドのヘネシー家と共通する。
- (3) 大久保利通の随行者は、外務省資料には日本人しか掲げられないけれども、『大久保利通日記』に「随員外国人法律博士ボアソナード氏李仙得（筆者注、ルジャンドル）氏ピットマン氏」と延達館で慰労会をした、とある〔外務省調査部編 1939: 218; 侯爵大久保家 1927: 363〕。なお小林〔1994〕に引用される Sandra C. T. Caruthers. 1966. “Charles LeGendre, American Diplomacy, and Expansionism in Meiji Japan” Ph.D. dissertation, University of Colorado. (筆者未見) によれば、ピットマンとルジャンドルは、ルジャンドルが駐廈門アメリカ領事だった1866年から72年の間に知り合ったらしい。
- (4) 1875年1月から4月まで、ピットマンは陸軍参謀局から招魂社（現在の靖国神社）内に住居を提供され、76年春には福原と清国華北地方の偵察行をした〔陸軍省 1875; 明治政府翻訳草稿類纂: 36巻〕。のちの満鉄社長、樞密顧問官安広伴一郎は、1880年頃、ピットマンの書生だったという〔平塚 1930: 23-27〕。なお、大隈の下野後も、ピットマンは大隈と連絡を取り続けたが、1885年12月、ヘネシーの近況を伝える手紙を最後に、以後の消息は不明である。人名録からもピットマンの名は消えてしまう。
- (5) そもそも大阪造幣寮に据え付けられた機械一式は、香港造幣局の中古品だった。しかし、香港造幣局はその鑄造する貨幣が中国人に受け入れられず、わずか2年で閉鎖されていた〔岡田 1956c: 102〕。
- (6) 当時の海峡地帯における日本銀円の地位について、岡田〔1956c: 126〕は既に法定通貨であったとするが、ピットマンは安藤太郎とシンガポールへ出張し、同地総督へ通貨公認を申し入れた、と報

告している [Pitman 1878]。本稿ではピットマンの報告書に依った。

- (7) バルバドスと香港でヘネシーの補佐官を勤めた人物に、英国陸軍工兵士官ヘンリー・パーマーがある。パーマーは日本で水道と港湾設備の工事顧問をつとめる傍ら、井上馨に見出され、ハウスと同じく、親日派ジャーナリストとして活躍した。[樋口・大山:1987]

- (8) グラント来日の模様は、Young [1879] とその日本語版解説を参照。ヘネシー応接にも相当の出費がされて、宿舍に当てられた井上の官邸は、1500円をかけて漆細工の名工、橋一の手で調度品が全て新調された。当初6週間の滞在予定は3か月と倍増し、応接費用も5000円増額されて10378円にのぼった [公文録: 明治12年・第93巻・明治12年11月・大蔵省; 林 1910: 164]

- (9) グラッドストーン宛ヘネシー書翰は大隈文書C2030に和訳があり、それを借覧した臨時帝室編修局による解説が付されている。この和訳は、日本史籍協会叢書『大隈重信関係文書』第6巻にも掲載された [侯爵大隈家 1935: 523-525]。

同封されたという「大蔵卿の紹介文」が、末尾にある「函館での演説の写し」と同じであるか定かではないが、大隈文書、グラッドストーン文書のいずれにも添付書類は見つからない。しかし、Japan Weekly Mail [1879] にヘネシーの函館演説の記事を見出した。ヘネシーは日本の進歩、北海道の産物を大仰に褒め称えた上で、「グラッドストーン氏の素晴らしい財務の舵取りも…大隈氏の業績に比べれば平凡」とさえいったらしい。Japan Gazette [1879e] は例にならって、大隈がグラッドストーン以上なら、第一銀行頭取の渋沢栄一はロスチャイルドに優る銀行家だろうと皮肉った。

また、ヘネシーのパークス非難が何らの結果をもたらさなかった理由には、在外イギリス人の間でパークスはヘネシーより遙かに受けがよかったこと、植民省の管轄にあるヘネシーが外交官人事に口出しするのは全くの横槍であったこと、グラッドストーン宛書翰で攻撃されるジュリアン・パウンスフォートは後に男爵にされるほど有能だったことなどが考えられる。

- (9) 1890年、ヘネシーは帰国して下院選挙に出馬、30年ぶりに議会へ再び戻る。だが翌91年3月、熱

帯貧血症で突然の死をむかえた。享年57歳。ヘネシーの個人文書は、ウィジャ盤のお告げを信じた未亡人が多くを廃棄したというが、残存分が The Getty Research Institute Research Library に子孫の関係資料と合わせて保存されている [Stearn: 382; Pope-Hennessy 1964: Author's Note]。

#### 参考文献

- 青山学院資料センター. 1994. 『飯久保貞次旧蔵安藤太郎関係文書目録』青山学院資料センター. 37pp.
- 伊藤博文関係文書研究会編. 1973-81. 『伊藤博文関係文書: 第1-9巻』塙書房.
- 井上馨. 1879. 「10月21日付安藤太郎宛書翰」青山学院資料センター蔵『安藤太郎文書』五, 1.
- 井上馨侯伝記編纂会. 1934. 『世外井上公伝: 第3巻』内外書籍. 16+944pp.
- 岡田俊平. 1956a. 「上海交換所設立立案」『大隈研究』7号. 61-83pp.
- 岡田俊平. 1956b. 「日本貿易銀」『成城大学経済研究』5号. 100-128pp.
- 岡田俊平. 1956c. 「日本円銀の海外流通策」『成城大学経済研究』6号. 101-128pp.
- 大隈侯八十五年史編纂会編. 1926. 『大隈八十五年史: 第1巻』大隈侯八十五年史編纂会. 64+82+872pp.
- 大蔵省財政金融研究所財政史室. 1998. 『大蔵省史: 第1巻』大蔵財務協会. 7+15+748pp.
- 外務省編. 1950a. 『日本外交文書: 第11巻 (明治11年)』日本国際連合協会. 34+550pp.
- 外務省編. 1950b. 『日本外交文書: 第13巻 (明治13年)』日本国際連合協会. 31+590pp.
- 外務省調査部編. 1939. 『大日本外交文書: 第7巻 (明治7年)』日本国際協会. 3+754+58pp.
- 侯爵大久保家蔵版. 1927. 『大久保利通日記: 下巻』日本史籍協会叢書. 2+540pp.
- 侯爵大隈家蔵版. 1934. 『大隈重信関係文書: 第5巻』日本史籍協会叢書. 18+480pp.
- 侯爵大隈家蔵版. 1935. 『大隈重信関係文書: 第6巻』日本史籍協会叢書. 22+552pp.
- 『公文別録』. 国立公文書館所蔵.
- 『公文録』. 国立公文書館所蔵.
- 国立国会図書館参考書誌部編. 1975. 『井上馨関係

- 文書目録』国立国会図書館. 18+407pp.
- 小林隆夫. 1994. 「台湾事件と琉球処分(Ⅱ)」『政治経済史学』341号. 13-32pp.
- 島善高・重松優. 2006. 「峯源次郎旧蔵・大隈重信関係欧文文書について」『社会科学総合研究』7号 刊行予定.
- 『太政類典』. 国立公文書館所蔵.
- 徳富蘇峰談. 1953. 「書翰を展べて大隈侯を語る」『大隈研究』3号. 147-156pp.
- 中村直美. 1968. 『大隈財政の研究』校倉書房. 296pp.
- 昭和女子大学近代文学研究室. 1957. 「E. H. ハウス」(『近代文学研究叢書: 第5巻』所収) 昭和女子大学光葉会. 418pp.
- 萩原延寿. 2001. 「離日: 遠い崖-アーネスト・サトウ日記抄14」朝日新聞社. 340pp.
- 林董. 1910. 「後は昔の記」時事新報社. 256pp.
- 樋口次郎・大山瑞代編著. 1987. 「条約改正と英国人ジャーナリスト: H. S. パーマーの東京発通信」思文閣出版. 264+ xii pp.
- 平塚篤編. 1930. 「伊藤博文秘録: 続」春秋社. 8+254pp.
- 『明治政府翻訳草稿類纂』. 国立公文書館内閣文庫所蔵. (ゆまに書房の影印本全49巻及別巻を参照)
- 山本茂. 1943. 「条約改正史」高山書院. 2+18+780pp.
- 郵便報知新聞. 1879. 「香港知事ヘネッシーノ来航」1879年6月10日.
- ユネスコ東アジア文化研究センター編. 1975. 「資料御雇外国人」小学館. 524pp.
- 読売新聞. 1879. 「読売新聞附録」1879年6月21日.
- 陸軍省. 1875. 「大日記 諸局伺届並諸達書 1-4月水陸軍第1局」防衛庁防衛研究所所蔵. (国立公文書館アジア歴史資料センター HP で閲覧)
- 早稲田大学社会科学研究所編. 1961. 『大隈文書: 第4巻』早稲田大学社会科学研究所. 7+402pp.
- The Daily Press. 1872-1885. *The Chronicle & Directory for China, Japan & the Philippines*. Hong Kong.
- Hennessy, John Pope. 1879a. "Letter to Salisbury" 早大大隈文書 C300.
- Hennessy, John Pope. 1879b. "Letter to William Gladstone" 早大大隈文書 C301.
- Hennessy, John Pope. 1879c. "Letter to William Gladstone" the Gladstone Papers at the British Library (microfilm: Papers of the Prime Ministers of Great Britain, Series 8, Part 8 Reel 24)
- Hennessy, John Pope. 1880a. "Letter to E. H. House (和訳)" 国立公文書館所蔵「翻訳集成原稿: 9巻」
- Hennessy, John Pope. 1880b. "Letter to Okuma Shigenobu" 早大中央図書館特別資料室貴重書 AE 3871 26.
- Hennessy, John Pope. 1881. "Letter to Okuma Shigenobu" 早大中央図書館特別資料室貴重書 AE 3871 25.
- The Japan Gazette. 1873-1885. *The Japan directory*. Yokohama.
- The Japan Gazette. 1879a. "Our fellow-countrymen in Hongkong..." Feb. 22, 1879.
- The Japan Gazette. 1879b. "The *Belgic* arrived to-day from Hongkong..." June 7, 1879.
- The Japan Gazette. 1879c. "Mr. Hennessy, the unpopular Governor..." June 9, 1879.
- The Japan Gazette. 1879d. "His Excellency Okuma's weekly paper..." July 26, 1879.
- The Japan Gazette. 1879e. "Mr. Hennessy recently paid..." Aug. 23, 1879.
- The Japan Gazette, ed. 1882. *The currency of Japan*. Yokohama: the Japan Gazette Office. xxii+331
- The Japan Punch. 1879-1880. (雄松堂出版の復刻版を参照した)
- The Japan Weekly Mail. 1879. "Governor Hennessy at Hakodate" Aug. 16, 1879.
- Pitman, John. 1877. "Letter to K. Nakamura" 早大大隈文書 C598.
- Pitman, John. 1878. "Letter to H. Hijikata" 早大大隈文書 C600.
- Pope-Hennessy, James. 1964. *The verandah*. New York: Alfred A. Knopf. xii+388+xi pp.
- Pope-Hennessy, James. 1969. *Half-crown colony: A historical profile of Hong Kong*. Boston: Little, Brown and Company. 150pp.
- Robertson, John. 1873. "Letter to Okuma Shigenobu" 早大大隈文書 C647.
- Stearn., Roger T. 2004. "Sir John Pope Hennessy" Oxford Dictionary of National Biography: vol. 26. Oxford: Oxford University Press. xv+1002pp.

---

Young, John R. 1879. *Around the world with General Grant*. New York: The American News Co. (宮永孝訳, 1983.『グラント将軍日本訪問記』雄松堂書店, 3+274+13pp)